『入試必携 英作文 Write to the Point』を用いて発信力を鍛える①

吉川　大二朗

1．It's all Greek to me. で始まった英作文指導

私が高校に入学して，最初の「大学入試のための英作文」指導は，「英文の暗唱」であった．当時の大学入試の英作文と言えば，和文英訳が定番であり，学んできた英文法や英語表現にいかに工夫を凝らし，与えられた和文を英語に訳すかというよりも，むしろ教養としての英語表現をどれだけ蓄積しているかが問われる問題が多かったように思われる．その当時使用していたテキストの名前は，もはや思い出せない．応用して使える英文もたくさんあったはずなのだが，It's all Greek to me. なぜかこの一文だけは鮮明に記憶に残っている．その日本語訳は「ちんぷんかんぷんだ.」であった．

私が大学受験を終えて，30 年以上が経つ．その頃から比べると，大学入試で問われる英作文問題は，知識や教養としての英語から，実用性や思考力，表現力や判断力が問われる英語へと大きく変化し，東京大学，京都大学においても自由英作などが出題されるようになり，和文英訳も，柔軟かつ深い思考力を基軸とした表現力が問われる時代に変わってきた．大いに歓迎すべき変化といえる．

今，私が生徒たちに，この「ちんぷんかんぷんだ.」という和文の英訳を示すのであれば，以下のような前提を考えることになる．

⑴ この和文が用いられている状況やコンテクストはどのようなものか？

⑵ この和文の内容を伝える相手はどのような人物なのか？

『ウィズダム英和辞典 第 4 版』（三省堂）には，Greek の 3 番目の語義に，「(くだけて)わけのわからないこと」とある．したがって，Greek を用いたこの定型表現は完全にフォーマルなものではない．また，ギリシャ語は英語の母語話者にとっては，アルファベットそのものが異なり，数学の数式記号や大学の社交界，そして(主にキリスト教に関わる)宗教的な場面など，特殊な状況でギリシャ文字が使われることが多い．したがって，伝える相手はそれなりに教養があり，「ギリシャ文字が使われていて，何を伝えようとしているのかが分からない」というユーモアを理解できる相手が前提となる．

果たして，大学受験を控えた生徒たちに上記のような観点まで指導するだろうか？ 恐らく大学入試では，そこまで求められるような問題は出題されないように思われる．したがって，この和文一文から生徒に提示する解答例は以下のような英文となる．

⑴ I don't understand it at all.

⑵ I have no idea what that means.

⑶ I don't have the slightest idea about it.

最もシンプルで生徒に理解しやすいのは not at all を用いた⑴となる．そこに no idea と間接疑問の表現を用いてほんの少し表現に工夫を加えたのが⑵，そして，「全く及びもしない」という意味をさらに格調高く表現すれば not the slightest idea を用いた⑶くらいが適当だろうか．

2．実際の教育現場における指導

私の現在の勤務校は中高一貫校で，中学 1 年生から持ち上がって，現在は高校 3 年生を指導している．高校 2 年生の始めから，『入試必携 英作文 Write to the Point』（以下，『必携英作文』）を使用して生徒と一緒に，大学入試に向けた英作文の取り組み方について学んでいる．

『必携英作文』は，現勤務校で長年にわたって採用され，生徒の大学受験の指導に大きく寄与している教材であり，前勤務校でも使用されていた．今回は，この教材をこれまでに使用してきて，教員側の立場，そして生徒たちの反応(生徒たちが抱く疑問点や生徒たちが思いついた別解に関する質問の内容など)をもとに，私見としてこれまでに気付いてきた，教材の「強み」や，「教材観」を示し，さらに

具体的な指導事例をまとめてみたい.

3.『必携英作文』の強み

・「発信」に特化された文法と汎用性の高い表現

古くから日本の学校教育に根を下ろしている「クジラ構文」をご存じだろうか？「クジラが魚でないのは，ウマが魚でないのと同様だ.」A whale is no more a fish than a horse is. という文である. この比較表現を用いた A is no more B than C is. の表現は，「受信(読解)」で用いられることはあっても，「発信」としては「話す」ことはもちろん，「書く」ことにおいても，よほど格調の高い英文でなければ不自然な表現となってしまうだろう.

『必携英作文』の指導の観点に立って英作文をすると，以下のような文になるのではないだろうか.

⑴ A horse is not a fish. A whale is not a fish, either.

⑵ As horses are not fish, whales are not fish, either.

⑶ Neither horses nor whales are fish.

⑴は中学レベルの表現を用いて2文で構成し，⑵と⑶は接続詞や高校レベルの表現をもとに構成してみたが，⑵が最も推奨したい模範解答となるだろうか. As S' V' 〜, S V ....「S'V'〜なので〔SV ように〕，SV ...である」は生徒にとって最も汎用性が高くミスが生じにくいからだ.

前置きが長くなったが，『必携英作文』では，上記⑵のような汎用性が高い表現が厳選されている. どの表現を用いるのが適切かは，文脈や文章のフォーマルさによって使い分けられる必要がある.『必携英作文』で用いられている表現は，ちょうどよい格調の高さの表現が多く，生徒にとっては非常に幅広く使える表現が中心となっている.

汎用性が高いことの利点として，「〜ぶりに」という表現を例にして説明したい.

「ジョシュは3年ぶりに故郷へ帰ってきた.」
Josh returned to his hometown after a three-year absence.
「ジョシュは3年ぶりに私に連絡をしてきた.」
Josh contacted me after three years of silence.

「〜ぶりに」に関して，absence や silence を用いることは，非常に洗練された表現といえる. しかし，「不在」と「沈黙(＝連絡が途絶えていた)」の区別が必要となるため，生徒にとってはやや難しい. それに対して，for the first time in three years はかなり汎用性が高い表現と言えるのではないだろうか.『必携英作文』では，もちろん for the first time in 〜の使用を推奨している(9章「時間」).

この absence や silence の区別は，私立大学などにおける選択肢型の問題や，語句整序の問題においては必要な知識となり，「受信」として「〜ぶりに」という日本語訳が想起できることも重要である.「発信」(特に英作文)のために必要な表現か，それ以外の場で必要とされる表現かの区別は，大学受験においては，極めて重要と言える.

・主語とそれに伴う動詞とその時制の選択

『必携英作文』では，1章，2章で主語の選択について学ぶ.「〜は少ない」「〜は増えている」や，一般の人を主語にする際や，特定の集団を主語にする場合には，どのように主語を決めればよいかをまず学ぶ. そして5章，6章で現在完了形と過去形，未来表現と現在時制の使い分けといった時制の表現について学ぶ. これは英作文において，ほぼすべての英文が主語と動詞を含むためである. そして主語と動詞の決定が重要であり，動詞の時制の選択を含めて，これらが生徒に最もよく見られるミスだから，この章立てとなっているのだろう. 実際，これらは私自身が生徒たちの英作文を添削していても頻繁に指摘をするミスであり，英作文以外の文法問題でもよく問われる文法事項である.

本号では，近年の大学入試の英作文の傾向に始まり，『必携英作文』の教材としての「強み」と「教材観」についてまとめた. 113号ではこれらの内容をさらに掘り下げてまとめてみたい.

(立命館慶祥中学校・高等学校 教諭)